

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

| | |
|-------|--------------------------|
| 施設名 | 太陽の子 シーバンス保育園 |
| 施設所在地 | 東京都港区芝浦1-2-2 シーバンスアモール3F |
| 法人名 | HITOWAキッズライフ株式会社 |

1. 活動のテーマ

<テーマ>

絵本

<テーマの設定理由>

(テーマに関する子どもの興味関心、園の特色など)

- ・自園の子どもたちとスタッフが、遊びの中で親しんだり楽しんだりしているものが絵本である。
- ・近隣の図書館との交流もあるが、散歩の活動時間内では時間に限りがあり、ゆっくりと楽しむ事が難しい。自園のホールは広いが、構造的に活用が難しいスペースがある。そこを図書館のようにすることで、子どもたちの活動の幅や子どもとスタッフの仲も深まると考えた。
- ・絵本作家さんなどの講師を招いた活動も十分なスペースを確保出来る。また、絵本から広がる活動は沢山あると考え、子どもとスタッフがワクワクするような活動が継続的にでき、保護者や地域の方々とも共有できるイベントにも繋げていきたいと考えた。

2. 活動スケジュール

・『写真を撮る』ということに興味を持つ姿が見られた為、本物のカメラを用意すると、それぞれが好きなものを撮影して楽しむようになった。その写真を「写真展」として飾ったことに加えて、さらに活動を発展できるのではと思い、子ども会議を開くと「写真で絵本を作りたい」という意見があがった。写真や絵本への興味を深めていけるような活動を計画した。

5月：折り紙の本を見ながらパッチンカメラを作ったところ、子どもたちが興味を持ち始めた。1人1つ自分のパッチンカメラを持って散歩に行くとカメラへの興味がさらに広がった。ドキュメンテーション作成のため、保育者が写真を取っている姿をみて、自分たちも「実際のカメラで写真を撮ってみたい」という声が子どもたちからあがった。

7月～8月：実際のカメラ（子ども用）を購入。子どもたちとの話し合いで、カメラの使い方や写真を撮るルールを決めた。室内や戸外で順番に写真を撮るようになった。

8月：廊下に写真を貼りだし、『ひまわり組写真展』を始めた。子どもたちは自分で撮った写真を他の人に見てもらえることの嬉しさを感じたり、自分が撮った写真を説明したりする姿があった。他クラスの子もや保護者も廊下を通る時に写真展を見ていた。その事を伝えるととても喜び、さらに写真を撮ることへの意欲に繋がった。

9月～10月：引き続きカメラでの撮影を楽しむ中で、写真と思い出がどんどん増えていくと同時に実際に撮ることがどんどん楽しくなっていた。

11月：撮りためた写真をどうするか子ども会議を開く。さまざまな子どもたちの声に加え、保育者からの提案で「写真集」というものを知ると、とても興味を持っていた。

12月：絵本コーナーが設置されると「図書館みたい」と目を輝かせていた。子ども会議では沢山の絵本に触れた子どもたちから「写真で絵本を作りたい」という意見があがり、写真と絵本を組み合わせ、自分たちで色を付けるなどしながら、オリジナル絵本を作ることにした。子どもたちが好きなカブラと写真を組み合わせようという意見があがり、少しずつ作ったカブラを撮影する。

12月16日：保育参加で保護者の方にもカメラの体験をしてもらおうと計画。親子で何を撮るか相談しながら、保育室内を回って写真を撮っていた。保護者の方も何を撮ろうかと笑顔が見られた。

12月～2月：「カブラの絵本」を購入すると、様々な作品を見て刺激を受けていた。写真の活動と並行して、引き続きカブラも楽しむ。5歳児もカブラに対する興味が強く、様々な物を作っていて、最後に作品集を作る計画をする。様子は随時ドキュメンテーションを作成し、保護者にも共有している。

1月14日：絵本作りを楽しむと同時に、「絵本を作る」作業の難しさを知る。試行錯誤しながら作り上げたオリジナル絵本を見て子どもたちがどのような思いを抱くか観察する。また、出来上がった絵本についてはドキュメンテーションで配信したり、保育室の棚の上に飾り、自由に見られるようにしている。

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

(活動のためにどのような環境を設定したか、準備した素材や道具)

- 絵本コーナー充実のための本棚
(4・5歳児)
- カプラの絵本3冊
- からからつみき
(3歳児)
- 3歳のえほん百科

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

1. 子どもたちがどのようなものに興味を持っているか観察する。
2. 折り紙のパッチンカメラを持って散歩に行くと興味を持ったものを撮る遊びが広がった。その後、保育者が持つカメラに興味を示し、「本物のカメラ」で写真を撮ってみたいという気持ちが芽生える。
3. 環境作り① 実際に写真が撮れる子ども用カメラを用意し、日頃の活動や自由遊びの中で写真を撮る。
4. 環境作り② 撮った写真を「写真展」として掲示する。他クラスの子や保護者も見られるよう、廊下を選ぶ。沢山の人の見てもらい、「いい写真だね」など声を掛けられると嬉しそうな様子がある。
5. 環境作り③ 園内のホールに絵本コーナーが出来たことで、絵本への興味が増し、1日の中で絵本に親しむ時間が増えた。様々な絵本に触れ、物語を友達と共有して楽しむ。また、絵本には作者や作画、翻訳者など多くの人に関わって1つの絵本が出来ている事を知る。12月3日に「ねこのピート」や「カラーモンスター」シリーズを翻訳している大友剛先生を招いてコンサートを実施すると絵本がプロジェクターに映し出され、絵が動く姿に感動している様子だった。
6. 環境作り④ 写真展以外にも何か他のことができないか、子ども会議で考え「絵本を作る」という案が出る。大友剛先生のように、絵本に自分たちの名前を入れるという意見もあがる。以前から好きだったカプラを写真の活動と繋げ、カプラの絵本を作ることにする。
7. 環境作り⑤ 出来上がった「カプラ絵本」は保育室の棚の上に置き、保護者が自由に見られるようにする。今後、ホールの絵本コーナーにも置き、他クラスの保護者にも共有する。

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

(活動の内容、活動中見られた子どもの姿、保育者との関わり等)

・パッチンカメラから本物のカメラに興味を広がり、実際に自分で写真が撮れるととても喜ぶ姿があった。写真がどんどん溜まっていき、写真をどうするか、子どもたちの意見も大切にする為、子ども会議で話し合ってきた。意見が出ない時や困った時はスタッフが助言をし、写真を使って絵本を作ることにする。

・写真を撮る時は、自分が好きなものを迷わず撮りに行く子、担任を撮る子、友達に「撮って」と頼んでいる子など、それぞれの楽しみ方があり、撮ったものを見せ合いながら自然と子どもたち同士の会話も広がった。保育者は子どもたちが撮った写真を一つずつ見ながら、それぞれの個性を認め、子どもたちのやる気をさらに引き出せるよう声を掛けた。

・カプらの作品を撮る時は、よく映るように角度を考えたり全体が映るように距離を試行錯誤しながら撮る姿が見られた。

・絵本作りの中で、どのようなものができるかワクワクするする姿もあったが、同時に難しさも感じていた。写真を自分たちで切ったり貼ったりし、何を作ったのかを字で書くことで自分たちで作り上げる特別感を感じていた。字を書くことが難しい子にも「「お」はこうやって書くんだよ」と友達が声をかけ、子どもたちで取り組む姿が見られた。最後に会議を開き、絵本の表紙の色や絵本の題名を考える時間を設けると「みんなが好きな色を入れたいから虹色がいいんじゃない?」「絵本ってという言葉は入れたいな」など、それぞれ意見を出し、保育者がそれぞれの意見を1つにまとめて伝えることで全員が納得するものに決定した。出来上がった絵本を見ながら「ここが難しかったんだよね」「これ楽しかった」と、カプらの活動を振り返る姿が見られた。その後も、友達が作った作品を見て「それどうやって作ったの?」と関心を持ち真似をしたり一緒に作ったりする姿があった。保育者も、「こうなってるのかな?」と一緒に考えながら楽しんでいる。



5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

①個性豊かなで作ることが好きなクラスであった。日頃から折り紙が好きだったり、カプラと積み木を組み合わせた遊びの中で、思い付いたものを自由に形にすることを楽しんでいて、作る姿は見られたものの、作品の構造や完成までの過程を意識して取り組む姿は少なかった。また、自身の活動を振り返ったり言葉で表現する経験は十分と言えず、遊びがその場限りで終わってしまうことが多かった。

②担任が作ったパッチンカメラがきっかけで、子どもたちはカプラ以外にも興味を持ち、大人がしている体験に憧れるようになった。本物のカメラを用意すると、実際に撮るということがどんどん楽しくなっていった。また、自分で撮った写真について友達に話をしたり、「撮って」と子どもたち同士のやりとりも増えていった。活動の繋がりが子どもたちもわかるようになり、先を見通したり、想像する力が付いてきた。さらにその作品を撮影しその写真で絵本を作る活動を行ったことで、自分たちの取り組みを振り返り、友達と意見を出し合いながら1つの物を作り上げようとする姿が増えた。

③写真を撮るという活動では、子どもたちが意外な物を撮っていて、子どもによって興味が違うことが改めてわかった。絵本という視覚的に分かりやすい教材を用いることで主体的に活動に参加し、イメージを広げながら表現していた。また、写真を活用することで活動の過程や成果を客観的に捉え、振り返る機会に繋がることが分かった。子ども自身が考え表現する経験を積み重ねることの重要性を改めて感じた。

④今後も写真を用いた絵本作りの活動を継続し、子どもの思考や表現がより深まるような環境構成を工夫していく。定期的に子ども会議を開き、常に子どもたちの声に耳を傾けながら取り組んでいく。進級当時はバラバラだった子どもたちが、同じ目標を持って取り組む経験を経てまとまってきている。子どもたちも保育者も、それぞれの個性を認め合いながら過ごしていきたい。

3歳児クラスは「おおかみと7匹のこやぎ」を読んだ子どもたちからごっこ遊びに発展し、クラス全体を巻き込む遊びとなった。発表会の演目として取り入れ、保育者と一緒にセリフを考え、大道具を作った。発表会の前に大友剛先生のコンサートで多様な表現を見て、歌や絵本への興味が増し、表現することが苦手だった子ども堂々と表現する事ができるようになった。5歳児クラスは文字も説明もない、カプラの写真だけの絵本を見ながら真似をすることが得意である。その絵本にはない自分たちが考えた『カプラ絵本』を作り、次の世代の子どもたちへ絵本を引き継ぎたいと考えている。幼児クラスは、個性豊かな子どもたちが同じ目標に向かって取り組む中で、友達とイメージを共有し、考えたものが具体的な【もの】になる経験をした。年齢によって具体物になるまでの考え方、形にするスピードなどが違い、成長過程や発達についても改めて学ぶことが出来た。作って終わりではなく、想像から創造へ繋がる活動を展開していきたい。